

あの頃の風景

静岡県熱海海岸

株式会社日本港湾コンサルタント
技術情報センター 調査役
生形勝利 UBUKATA Katsutoshi



■写真1—昭和14年に描かれた熱海の写実的な鳥瞰図(写真提供:熱海市立図書館)

東日本屈指の温泉観光都市「熱海市」が記録に現れるのが寛平8年(896年)流罪地としてで、その後の貞享4年(1687年)の記録によれば湯戸27軒、百姓76軒、水呑39軒及び医者1軒合計143軒(平成15年現在21150世帯)の村であった。明治に入り維新の元老三條、岩倉、大久保、木戸、西郷達の閣議の場として、西南の役に参加した將軍達の慰労の場としても利用されており、明治中期以降は坪内逍遙、志賀直哉、尾崎紅葉、船橋清一、吉川英治等の作家などの著名人が多く訪れている。

熱海市が観光地として有名になったのは、明治30年1月1日から明治35年5月11日まで読売新聞に掲載された尾崎紅葉作の「金色夜叉」で熱海海岸が舞台になってからであり、この後、宮島郁芳作詞・作曲「熱海の海岸散歩する・・・」の大ヒットからさらに有名になった。

熱海は関東の観光客が主体であったが、昭和9年の丹那トンネル開通に伴い、関西方面からの観光客も増加した。平成15年の熱海市観光商工課の統計による宿泊者数は昭和48年519万人、平成13年329万人と減少しているが、イベント・観光来訪者数は平成13年度の統計で550万人と僅かながら増加傾向(前年比:107.3%)が見られる。



■写真1—初代お宮の松(写真提供:熱海今井写真館)



■写真2—2代目お宮の松(写真提供:熱海今井写真館)

「金色夜叉」で有名な熱海海岸は、鳥瞰図に見られるように石積みの護岸が設けられた小田原寄り(鳥瞰図右側)の「横磯」と伊東市寄り(鳥瞰図左側)の和田浜の磯と砂浜からなる海岸であった。昭和初期頃までの和田浜は遠浅

で砂浜の海岸であったが、大正7年に開始した丹那トンネルの工事に伴うズリを用いた埋立工事による汀線の変化、砂防工事による砂の供給の減少に伴って浸食海岸となっていた。

浸食対策は写真3で見られるように赤根崎寄りの和田浜埋立地からの防波堤と海岸に平行な離岸堤を築造し、熱海海岸の浸食の原因となる波の侵入を防いでいる。また、護岸はコンクリート製の胸壁が作られ、一時は消波ブロックが据え付けられていた。

これらの浸食対策の結果、海岸の国道沿いからの熱海海岸の眺望は変貌した。熱海海岸の観光の目玉であるお宮の松のところからの眺望は、海岸線や遠くに初島、大島等が望めたが、現在は胸壁が視界をさえぎり望む事が出来ない。ちなみに現在のお宮の松は2代目で、初代お宮の松は道路整備が進み交通量の増加で昭和41年に枯れ朽ち2代目に植え替えられた。

熱海市では胸壁や離岸堤のカラーリング、親水型護岸への改造、プレジャーボートの係留施設などの整備と千葉県より運搬した砂を補給して砂浜の維持を行っている。



■写真3—平成15年の航空写真(写真提供:熱海市)



■写真4-a—遠浅だった明治後期の熱海海岸(写真提供:熱海今井写真館)



■写真4-b—現在の熱海海岸(写真提供:熱海市観光商工課)



■写真5-a—かつての熱海海岸(写真提供:熱海今井写真館)



■写真5-b—現在の熱海海岸